

「人間が人間である権利」としてのデモクラシー —チャールズ・キングズリーの「古代文明」を読む—

Democracy as “the Rights of Man as Man” : A Reading of Charles Kingsley’s “Ancient Civilisation”

清川 祥恵
Sachie KIYOKAWA

I 序

本研究は、英国ヴィクトリア時代の思想家であるチャールズ・キングズリー (Charles Kingsley, 1819-75) の「デモクラシー」(democracy) 概念について、主に彼の文明観を手がかりとして検討するものである。イングランド教会 (Church of England) の聖職者となる 1840 年代半ばより、キングズリーは「デモクラシー」を避けて通ることのできない「時代の新要素」とみなして警戒しており、1850 年には、とくに新興階級の台頭による社会の無秩序状態を批判することに、力をそそぐようになった。そして 1860 年代のアメリカ南北戦争期には、ケンブリッジ大学の現代歴史学欽定講座教授 (Regius Professor of Modern History) であり著名な作家でもあるという立場から、当然のごとく北部支持者と推測されていたにもかかわらず、南部支持を表明して物議をかもし、この背景にも、彼の「デモクラシー」への恐れが大きな影響を及ぼしていた。すなわち、北部諸州が象徴する、衆愚政治としてのデモクラシーへの危惧である。

ヴィクトリア女王と当時のプリンス・オブ・ウェールズ (のちのエドワード 7 世) 付きの常任司祭を務めるなど、「体制派」の聖職者であったキングズリーは、「デモクラシー」をどのようにとらえ、アメリカ (北部) が代表する民主主義を批判したのか。同時に、英国とアメリカはどのような関係に位置づけられていたのか。そして南部の敗北によって、「デモクラシー」の理想像は変容したのだろうか。1874 年にウェストミンスター・アビー (Westminster Abbey) の参事会員 (canon) となったキングズリーは、アメリカ各地をめぐり、説教と大学での講演を行なった。F・D・モーリス (Frederick Denison Maurice, 1805-72) と共有し、生涯をつうじて保持していた反ローマ思想との関連もまじえ、最晩年の論説となった「古代文明」(“Ancient Civilisation”) に焦点を当てることで、その詳細を明らかにすることを試みる。

II 時代の新要素としての「デモクラシー」

キングズリーは、ケンブリッジ大学モードリン・コレッジ (Magdalene College) を卒業後、父親と同じく聖職に就き、1842年にハンプシャー州のエヴァーズリー (Eversley) に赴任、1844年に教区牧師 (rector) となった。以降、F・D・モーリスやトマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881)、J・A・フルード (James Anthony Froude, 1818-94) の影響を受けて社会への関心をつよめ、社会批判を展開してゆく (Colloms 58-59)。

1846年12月には、友人のリチャード・カウリー・パウルズ (Richard Cowley Powles, 1819-1901) に宛て、オックスフォード運動に対する疑義やのちに宿敵となるジョン・ヘンリー・ニューマン (John Henry Newman, 1801-90) への反感を示しつつ¹、次のように時代にたいする烈しい憂慮を吐露している。

私は、我々の世代の呪いは、なにかを深く信じている人がほとんどいないということである、という事実を、ますます痛感しはじめたのだ。人は真実をもてあそび、そして嘘をもてあそぶ。友よ、我々は神にたいし、我々に信仰を与えてくれるよう祈らねば。なにかへの信仰を——なにか我々が生きるための、そしてそのために死なんとするような信仰を。そうすれば我々は、自らの世代に善 (good) をなす支度をととのえ、実行することができる。(Letters 1: 140-41)

生死を賭すほどの信仰を欠いている、ということは、人々が生き方の指針を失っていることを意味しており、それが社会の諸問題の原因ともなっている。ここにはカーライルの影響が非常に色濃く見てとれる²。同じく12月にパウルズに送られた書簡では、キングズリーはこうした時代の変化を受け止めたうえで、いま現在における新しい「善」を具現化する必要があると説いている。

私の心は定まった。外へも内へも、後退するのではなく、前進するのだ。ささいな問題において理想的であった時代やシステムに戻るのではなく、現在を、そうあってほしいと思うようにではなく、正しく、ありのままに、受けとめることにした。そして、イエス・キリストがいまだ、すべての正直な善意の人間に働きかけると信じることに

¹ オックスフォード運動は、1833年のジョン・キーブル (John Keble, 1792-1866) による説教「国民の背教」(National Apostasy) を発端とした霊的刷新運動。機関紙『時局冊子』(Tracts for the Times) の内容にたいし、キングズリーは昂然と批判をくわえた。キングズリーの『ハイペシアー古き顔をもつ新たな敵』(Hypatia, or New Foes with an Old Face, 1853) と同作への応酬としてのニューマンの『カリスタ』(Callista, 1855) など、文学に見られるふたりの対立についての研究もなされている (サンダーズ、179-216頁)。キングズリーは「ローマ・カトリシズム」を「女々しい」(effeminate) ものとし、彼とモーリスが掲げる筋肉的キリスト教 (muscular Christianity) とは対置していた (Reed, 220)。

² キングズリーの主張には、不信仰の結果としての社会問題の指摘ほか、後述するような自由放任の民主主義批判、「大衆」蔑視、貴族階級による指導への期待など、カーライルの主な論点 (ウィリアムズ、72-86頁; ウィリー、138-43頁参照) が多数含まれている。

した。この時代における、靈的善 (spiritual good) の要素がなんであるか見てみよう。そしてそれらを具現化する芸術家となろう。古い形ではなく、新しい形でだ。[……] 教会と国家 (Church and State) において、新たな要素はデモクラシー (democracy) である。その善悪の議論は置いておくけれども、我々はそれを止めることはできない。かわりにそれをキリスト教化 (Christianise) しよう。(Letters 1:141)

新しく、時代に適した形で善を実行するためには、新たな社会的要素であるデモクラシーをキリスト教化しなければならない。これにつづいてキングズリーは、ここでの「デモクラシー」という語は「けしからぬ放逸」(foul licence) や「銜学的な政体利用」(pedantic constitution-mongering) ではなく、「人間の人間としての権利」(the rights of man as man) を意味するのだと断っている。しかしそれはあくまで、「神と国家に対する個人的・直接的責任」(his individual and direct responsibility to God and State) と同義なのであり (Letters 1:141)、天賦の人権や、教会制度とまったく切りはなされた世俗的体制によって社会を統治する権利を意味するものではない。信仰の欠如と、同時に立ち現れてきた「大衆」にただしく社会が対応していくために、「デモクラシー」を大衆の放逸のままにせず、彼らに「神への個人の直接的責任」というキリスト教的価値観を認識させることが必須であるという主張であった。

キングズリーは、「大衆」そのものも否定的にとらえていた。たとえば 1850 年 12 月に J・M・ラドロウ (John Malcolm Forbes Ludlow, 1821-1911) が「もっとも真実のデモクラシーは私にとっては社会主義だ」と述べたのにたいし、キングズリーは教区牧師ロト (Parson Lot) なる偽名を用い、「私の政治信条」(My Political Creed) と題した文章の中で、自らは君主制主義者 (monarchist) であると宣言し、共和制 (republic) よりも専制 (despotism) を好むと述べている。彼にとって「共和制」が示すのは、アメリカにおける「報道の傀儡」(the puppet of the Press) もしくは君主制といわれているイングランドにおける「資本家階級の奴隷」(the slave of the moneyed classes) となることであった (Kendall, 69)。1852 年 1 月 28 日のトマス・ヒューズ (Thomas Hughes, 1822-96) 宛の書簡では、こうしたアメリカのデモクラシー批判について、社会小説『オールトン・ロック——仕立屋詩人』(Alton Locke, Tailor and Poet, 1850) の出版を経て先鋭化した問題意識が見て取れる³。

私は、ここ最近 7 年の、自分のある考えから決して逸れたことはない。つまりこの時代の真の戦いは——イングランドが無秩序と不信仰 (anarchy and unbelief) から、そして労働者階級の競争による奴隷化 (the competitive enslavement of the masses) にひきおこされる完全な疲弊から救われるべきならば——急進党やウィッグ党の、ピー

³ 『オールトン・ロック』は、今日たとえば以下のように評価されている。「チャーティストからキリスト教社会主義者へと転ずる架空の人物オールトン・ロックの自伝という形式を採るこの小説は、社会の全般的な改善にはキリスト教が広くかつ深く浸透することが不可欠であるというキリスト教社会主義の立場から、信仰の問題を度外視して政治改革を突破口とする社会の改善を説くチャーティズムの『誤り』を明らかにすべく、執筆された」(小関、175-76 頁)。すでに見たとおり、キングズリーにとっては信仰に基づかない社会は認められなかった。

ル党やトーリー党に対する戦いではなく（死者をして死者を葬らしめよ）、教会、ジェントルマン、そして労働者の、商人（shopkeepers）とマンチェスター学派（the Manchester School）に対する戦いである。〔……〕我々は真の敵を知り、労働者たちも知るだろう。しかし、もし現在の内閣が彼らと労働者の連立の可能性を理解しないならば、競争主義のアメリカ合衆国（a competitive United States）を、つまり、その眼前では長年の労が数年で屈服してしまうような〔競争主義の〕デモクラシーを、避けるために全神経を緊張させる以外に選択肢はない。あなた方や私が見たいと願っているような本当のデモクラシーは、教会と女王なしには、そして私が信じているように、ジェントリーなしには不可能なのだ。（*Letters* 1:314-15、下線引用者）

大衆の手によって動かされる社会は秩序を欠いており、こうした野放しの民主主義は競争主義的アメリカに代表されるようなものであると、ここでもキングズリーは繰り返している。こうした見方はこの時代においては特殊なものではなかった⁴。そして、商人やマンチェスター学派の台頭と、彼らの放逸という、資本主義的価値観に振り回される「偽の民主主義」をただすためには、教会、女王（君主制）、ジェントリーによる「統御」が必要であった⁵。つまり、「デモクラシー」の「キリスト教化」とは、既存の（世俗的）階層構造を通じ、大衆に信仰啓蒙を行なうということを意味したのである。このキングズリーの競争主義嫌悪にもとづく社会観は、とりわけアメリカ北部へのまなざしを検討すると、よりはっきりと浮かび上がってくる。

III 南北戦争における「北部」批判

南北戦争（American Civil War）にさいしてキングズリーがとった立場については、ジョン・O・ウォラー（John O. Waller）による詳細な論考が1963年に発表されている⁶。ウォラーによれば、キングズリーは「熱心に南部の大義を信奉した唯一の文学者」として激しく非難をあびた⁷。ブレンダ・コロムズ（Brenda Colloms）の伝記『チャールズ・キ

⁴ たとえばキングズリーとマシュー・アーノルド（Mathew Arnold, 1822-88）は両者とも、フランス革命以降の状況とアレクシ・ド・トクヴィル（Alexis de Tocqueville, 1805-59）のアメリカのデモクラシー論をふまえ、新興階級およびレッセ・フェールへの危機感を共有していた。清瀧によれば、アーノルドは1861年のデモクラシー論においてイギリスに不可避なものとして到来するデモクラシー社会が「アメリカ的なデモクラシー社会」となること、つまり「アングロ・サクソンの中産階級の文化がデモクラシーを動かす精神的主導力」となりその文化が「自由放任原理の下で社会的に拡大していく」ことを恐れていた（91）。

⁵ より直接的に英米を比較したさいには、「アメリカのデモクラシーは単なる多数政治であり、どんなかたちであれ、より教育を受け熟達した少数派の代表者を選出しないし、教育をうけておらず未熟な多数派に物事の指揮をまかせる」が、「こうしたことは、優秀な知能と経験に発言権のみならず実権をあたえる世襲の君主制と貴族院をもつ国では起こらない」として、アメリカの政治体制の欠点を弾劾した（*Alton* 8）。

⁶ John O. Waller “Charles Kingsley and the American Civil War” in *Studies in Philology*, 60.3 (Jul., 1963):554-68.

⁷ モンキュア・ダニエル・コンウェイ（Moncure Daniel Conway）の自伝での分類によれば、「イングランドの著述家の3分の2が北部の大義を支持しており、うち数人は積極的」

キングズリー——エヴァーズリーの獅子』(Charles Kingsley: *The Lion of Eversley*, 1975)では、南部支持の理由について、キングズリーが北部のデモクラシーを「金をかき集めるような『多数政治』(a money-grabbling ‘arithmocracy’) とみなし、搾取につながる、抑えの効かない資本主義を許すものと考えていたことを挙げている (253)。なおこの「多数政治」という語は、『オールトン・ロック』再出版時に付された 1854 年の英国の労働者たち宛ての前書きに見られるキングズリーの造語である⁸。したがって、こうした偽りの民主政をとる北部を打倒することが人類に益することであり、ゆえにキングズリーは、長い目で見れば南部の勝利は黒人の利益になると確信していたのである (Colloms, 284)⁹。

ウォーラーはもうひとつの南部擁護発言として「南部のジェントルマンの罪が何であるとしても、彼はすくなくともチュートン人 (Teuton) であって、ローマ人 (Roman) ではない [からまじだ]」という発言を引いているが (Waller, 561)、この意味を理解するためには、キングズリーの歴史観を確認しておく必要がある。カーライルのドイツ趣味の影響を大きくうけ、ニューマンとの論争にも見られるような甚だしい反ローマ感情を抱いていたキングズリーは、チュートン人をイングランド人の祖先として強く意識していた¹⁰。1863

で、キングズリーと親交のふかかった F・D・モーリスやトマス・ヒューズもここに含まれた。その他ラスキンらのように、立場について沈黙をまもった人もいた (362-33)。キングズリーの 1857 年の小説『二年前』(*Two Years Ago*) においては、ジャーナリストの W・H・ハールバート (W. H. Hurlbert, 1827-95) やハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe, 1811-96) の影響を受けて奴隷制廃止支持だったとも考えられるが、ウォーラーは、キングズリー自身としてはあくまで自由土地運動に賛同する「フレモント支持者」(“Frémontier”) であって奴隷廃止論者ではないという認識だったと指摘している

(Waller, 554-57)。なおウォーラーは、この背景にはキングズリーが奴隷所有者の子孫であったという境遇、作家である弟ヘンリー (Henry Kingsley, 1830-76) との「暴力的な反北部連合感情 (“violent anti-Union sentiment”) の共有があったとする (Waller, 559)。公に向けた発言としては、講演で 1850 年の逃亡奴隷法が通過した時点で北部連合は解体すべきだった (この時点で南部に干渉する権利がなくなったため) と発言したこと、また非公式には、奴隷制は世界の始まり以来存在するので、それより戦争の方が「よりひどい悪」(worse evil) だと発言したことが記録されている (Waller, 561)。

⁸ *OED* の定義では、arithmocracy とは「たんに数的多数 (simple numerical majority) に権力が付与されている政治の一形態」である。キングズリーはこの「多数政治」対して、「デモクラシー」とは「たんに多数のばらばらな個人による統治を意味するのではなく、デモスによる統治を意味する」ものだとして、二者の違いを強調している。数の上での多数派による政治は確実に「暴民政治」(ochlocracy) すなわち暴徒 (mob) による政治へと退化するものでしかない (Alton 19)。

⁹ とはいえ人種的偏見を抱いていたことは間違いがなく、1863 年の説教では、黒人 (negro) は家族に対する情愛を有するがゆえに、もっとも上位の獣 (the highest brute) ではなく最も下等な人間 (the lowest man) たり得るという趣旨の発言等がある (*Pentateuch* 90)。なおキングズリーの人種・民族意識、とりわけモーリスからの影響については、スタンウッド・S・ウォーカー (Stanwood S. Walker) の論文に詳しい。

¹⁰ こうした意識は同時代の流行であり、神話研究者のベンジャミン・ソーブ (Benjamin Thorpe, 1782-1870) が著書『北方神話』(*Northern Mythology*, 1851) のなかで、次のように指摘した例もある。「北方文学は [……] 国内の北方のお話が好きな人やその興味深い土地に旅行するイングランド人たちのみならず、これらイングランドの古物収集家もまた楽しませる [……] かもしれない。大陸のゲルマン諸国の異教崇拝と、彼ら (イングランド人) 自身のサクソン人の祖先のあいだに存在する密接な関連、つまりそのなかに我々の

年には、ケンブリッジ大学歴史学欽定講座の教授として、タキトゥス (Tacitus, c.56-c.120) の『ゲルマニア』 (*Germania*) をもとにチュートン人を理想化し、ローマ人の社会体制を批判している (Kendall, 165)。この『ローマ人とチュートン人』 (*The Romans and the Teutons*) の講演内容は、のちにマックス・ミュラー (Friedrich Max Müller, 1823-1900) の序文をくわえて出版された。ガイ・ケンダル (Guy Kendall) は、このポストにおいて史実にかんする知識はそれほど必要なく、歴史から道徳を引き出す能力という意味でキングズリーは適任であったと見ている (161)。キングズリーの歴史観において、既存の政治体制の道徳的価値がどのように正当化されているのか、以下に具体的に見てみよう。

キングズリーは 1869 年にケンブリッジ大学での職を辞し、1870 年にはヨーク (York) のチェスター主教座聖堂参事会員、1873 年からはウェストミンスター・アビーの参事会員となり、翌 1874 年に訪米し、同地での講演内容を後日出版した¹¹。そこに収録された「アメリカの初発見」 (*The first discovery of America*) では、引き続き教授時代と変わらぬ、反ローマの歴史観を主張している。「アメリカ」をはじめて発見して入植したのはヴァイキングであり、「アメリカ人」はその子孫であるので、同じくヴァイキングがノルマン征服等をつうじて入植したイングランドと、かなりさかのぼった時点で共通の民族的起源を有していると言うのである。これは当時流行していた、デンマークの学者カール・クリスチャン・ラフン (Carl Christian Rafn, 1795-1864) の『アメリカの古代』 (*Antiquitates Americanae*, 1837) に依拠する見方である¹²。キングズリーは、フランスの北岸に侵入した北方人の「頭のロロ」 (“Rou, Rollo, Rolf the Ganger”) と彼の同胞たちは、真に偉大な精神、従順さと適応性をもってキリスト教に改宗、「異教の人殺しの狂戦士」 (heathen and murderous Berserkers) から「ヨーロッパでもっとも真に文明的な人々」 (the most truly civilized people of Europe) へと転身し、当時としては自然なこととしてローマ教皇の僕となったと説く。そしてその玄孫であるノルマンディ公ウィリアム (William) が「ヨーロッパ全体でもっとも教化された君主」 (the most cultivated sovereign) かつ「もっとも偉大な政治家であり戦士」 (and the greatest statesman and warrior) となったとするのである (LDA 77)。

最初期の年代記や詩人の作品を見いだすことのできる明白な痕跡という理由によってである」 (vii)。こののちにもチャールズ・フランシス・キアリー (Charles Francis Keary, 1848-1917) による『エッダ』のなかにチュートン人の起源をさぐる研究書 *The Mythology of the Eddas: How Far of True Tuetic Origin* が 1882 年に出版されている。

¹¹ 『1874年アメリカ講演集』 (*Lectures Delivered in America in 1874, 1875*) には 5 編の講演が収められている。1874年2月から7月にかけて行ったこの滞在での主な訪問地はニューヨーク、ボストン、セイラム、マサチューセッツ州ケンブリッジ、ワシントン、ニューヘイヴンといった東岸の諸都市から、コロラド、カリフォルニアなどの西部まで広範囲にわたり、鉄道を利用して移動した。 (*Letters 2: 405-46*)

¹² 『ヴィンランド・サガ』 (*Vinland Saga*) でヴァイキングが上陸したヴィンランドとはアメリカであるとする見方。「[……] 大西洋のこちら側では、合理的な疑いはなかった。我々自身の民族が、その縁者がやってくる 600 年前に、ニューイングランドの沿岸に上陸し定住しようとしたこと、そして多くの場合において、彼らの実際の子孫が 17 世紀のピルグリム・ファーザーたちだったということに」 (*Lectures 71-72*)。詳しくは、Geraldine Barnes, *Viking America: The First Millennium* (D.S. Brewer, 2001) を参照のこと。

ここで鍵となるのは、北方人自身の精神や順応性（＝キリスト教への恭順）を称賛している点である。つまり、のちのイングランド王となるウィリアムの教養は回心によるものである。さらにキングズリーは次のように、キリスト教化した北方人の子孫によるイングランド「征服」がすなわち「文明化」（civilise）ではなかった（＝ノルマン人がもたらしたローマの文明にイングランド人が隷属したわけではない）という見解に立つ。

ノルマン人によるイングランドの征服は、文明人による野蛮人の征服（conquests of a savage by a civilised race）ではなかった。また、勇敢な民族による臆病な民族の征服でもなかった。こうした〔文化的格差や勇敢さの差異による〕征服は、結果として征服された者たちを奴隷とし、二つの民族——主人と奴隷の間に階級のへだたりをのこす。たとえばフランスの事例では、幾世紀もの圧制ののちに、重大で恐ろしい1793年の革命に帰着し、それはフランスだけではなく、全文明世界（the whole civilised world）を震撼させたのである。（LDA 83）

文明人たるノルマン人が、野蛮人としてのイングランド人を征服したのではなかったがゆえに、イングランド人はノルマン人によって奴隷化されなかった。ゆえに、二者のあいだには隔たりはなく、互いに平等であった。ノルマン征服より以前に、イングランドはすでに文明的であったからである。

〔……〕どこから彼らの〔スコットランド、イングランド、アイルランド、ネウストリア、ロシア、東方バルト諸国の北方人たちの〕キリスト教はやってきたのか？ その大半は、デーン人たちのケースと同じように、そしてフランスのノルマン人たちがいっそうそうであるかのように、ローマから直接やってきた。その都市は〔……〕すべての文明の源泉（fount）であるのと同時に神学の源泉でもあった。しかし私は、その多くは謎めいた古い西方教会（ancient Western Church）からやってきたと考えている。すなわち聖パトリック（St. Patric）、聖ブリジット（St. Bridget）、聖コロンバ（St. Columba）の教会で、それらは北大西洋の岩だらけの小島と、そしてアイスランドでさえも、原始的な修道院（rude cells and chapels）で覆ったのである。（LDA 86-87、下線引用者）

聖パトリック、聖ブリジット、聖コロンバはいずれもアイルランドに関わりの深い聖人で、じっさいにローマとは別のルートでブリテン島におけるキリスト教布教に大きな影響を及ぼしたとされている¹³。北方人はノルマンディに侵入して「真のヨーロッパ人」（＝文明化

¹³ アイルランドのキリスト教がローマとは別のルートで同様に大きな役割を果たしていたことについては、今日の研究でも実証されている。「ブリテン諸島にキリスト教を根づかせるのに、少なくともその初期段階において、ローマから派遣された正規の宣教師に勝るとも劣らない功績を挙げたのは、アイルランドとスコットランドからやってきた修道士たちだった」（サイクス、野谷訳、3頁）、「アイルランドは、ローマ帝国の一体化の枠を超えた西方諸民族の中でも最も早く、主体的にキリスト教を受容した社会である。そのキリスト

されたキリスト教徒) となり、そこからブリテン島へと渡った。だがそこにいたのは野蛮人ではなく、すでに西方教会によって教えを受けたキリスト教徒という、おなじ文明人であった。このようにキングズリーは、ブリテンの人々の有史以来一貫した独立不羈を主張するのである。

キングズリーにとって文明化の度合いと階級差は直接的に接続しており、文明人が文明人に奴隷化されることはない。したがって、南北戦争の大義に戻れば、イングランドやアメリカは、ローマ社会の(後述するような)過ちとは無縁の民族的出自をもつ高貴な文明人の社会であり、また南部の奴隷制は文明人の野蛮人にたいする奴隷制であるという偏見から、キングズリーは南部の社会制度を支持した。階級は文明化の差、教育の差によって当然発生するのであり、そのような理にかなった統治ではなく、金儲けという卑しい目的を志向する愚かな大衆の暴政を容認している北部の方が、いっそう罪深いと見なしたのである。

IV 人間社会の理想形態としてのデモクラシー

ではそもそもこの「文明」自体はどのようにして導かれてきたものなのか。「人間の人間としての権利」であるデモクラシーの性質を明らかにする手がかりとして、「アメリカの初発見」と同じ論集に収録された講演「古代文明」における定義を見てみよう。この講演は、ダーウィンの進化論を受けて、「どのようにして、この人間と呼ばれる生き物 (this creature called man) は、[……] 文明化され、理性的、道徳的になったのか」(LDA 125)という問いを出発点とするものである。

私にとって文明 (civilization) は、より多くの富 (wealth) や華美 (finery)、放縦 (self-indulgence)、さらにはより多くの美的・芸術的快樂 (aesthetic and artistic luxury) を意味するものではない。そうではなく、より多くの徳 (virtue) や知識 (knowledge)、自制 (self-control) を意味するのだ。たとえ重労働によってわずかな糧を得るのだとしても、[……] よって隠者 (hermits)こそが文明人であり、カエサルはそうではないということになる。(LDA 129)

カエサルではなく隠者、という表現は直接的にキリスト教的清貧を示唆していると考えられる。「徳」、「知識」、「自制」は、「ペトロの手紙二」で信仰に加えるべき要素として列挙されているものである¹⁴。キングズリーは、ローマ皇帝カエサルの軍事・官僚独裁は「死せる自由」(dead freedom)の形態で、暴力 (brute force) によって「つくりものの快樂」

教受容には、ローマ世界とは異質のケルト民族固有の社会・文化・風土地盤に根を下ろしていくアイルランド教会独自の発展動向が認められるのである」(盛、192頁)。

¹⁴ 「だから、あなたがたは、力を尽くして信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には信心を、信心には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい」(ペトロの手紙二 1.5-6、新共同訳、下線引用者)。ただし欽定訳では「自制」に当たる語は temperance となっている。

(artificial luxury) を支え、あらゆる貴族政治のなかでもっとも下劣な「金持ちの貴族政治」(aristocracy of the money bag) を聖別すると痛罵した (LDA 143-44)。こうした帝国主義 (imperialism) を打破するものがこそがデモクラシーであり、それこそが人間社会の理想の形態 (the ideal form of human society is democracy) なのである (LDA 147)。ここでも一貫して、「ローマ、拝金主義 (と、それに類するアメリカ北部に代表される競争主義) という野蛮」と「チュートン、ゲルマン、北方人とその子孫たちに代表される文明すなわちキリスト教信仰」という構図は堅持されている。言い換えれば、信仰にともなう徳、知識、自制によって文明化されることで、人間は人間としてはじめて理性的な存在となるということであった。

そしてこれは、キリスト教以前の人間世界でも同様である。『英雄——すなわち我が子らのためのギリシャのおとぎ話』(*The Heroes; or, Greek Fairy Tales for my Children, 1856*) の序文を引用する。

これらの古代ギリシャ人達はよく学び、周りのすべての民族から学んだ。[……] これにおいて彼らは我らの祖先の北方人 (the Northmen) たちと同じようであった (君らが話を聞くのが好きな彼らは、野性的で乱暴だけれども謙虚で誰からも喜んで学んだ)。それゆえに神は、我らの祖先に報いたのと同様に、これらのギリシャ人達に報いたのだ。そして彼らを、彼らが学んだものすべてにおいて、彼らに教えた人々よりもいっそう賢明にした。というのも神は、心をひらき進んで学ぼうとする人間と子供達を見るのを愛したからである。そして学んだことを使おうとする人に、神は日々よりおおくのものを与える。そのためにこれらのギリシャ人は賢く強くなり、世界の終わりまで生き続ける詩を書いた。[……] そしてほかの多くのすばらしいことを神は彼らに教え、そのために我らは今日、より賢明になっている。(Heroes 14-15、下線引用者)

つまり、古代の「文明」もまた、ただしく徳に従って生きる人間たちにもたらされた「神の恩寵」だったのであり、ギリシャの英雄たちは、学ぼうとする謙虚な姿勢によってこうした恩寵を受け、賢明になった。そしてその文化が、時代を脈々とくだって受け継がれてきたのである。同時に、次の箇所でも強調されているとおり、彼らの名声はひとえに境遇ではなく彼ら自身の性質・能力によるものであった。

[……] 君たちはこの本を読んで、彼ら〔古代の人々〕のことを、後に美しい諸作品を生み出したときにそうであったように、学のある、大都市に住む人間であるとは考えてはならない。彼らは田舎者のように、農地と壁に囲まれた村で、質素に身を粉にして働きながら生きていた。ゆえに偉大な王と英雄たちは自身で彼らの食事を拵え、それを恥とは思わず、船や武器をつくって、自身の馬にえさをやってしつけた。そして王妃たちは召使いといっしょにはたらき、家の中の仕事をすべて行なって、紡ぎ、織り、刺繍をし、主人達と彼女たち自身の衣服をつくった。だから人は彼らのあいだで讃えられた。たまたま裕福になったからではなく、彼の技術、強さ、勇敢さ、彼ができるかずつのこによってだ。(Heroes 19-20、下線引用者)

英雄たちは、今日のこされた偉業からは想像できないような、日々の務めをはたす者であって、生まれ持ったものではなく、自らの行ないによって称えられる存在となった。ただし、ここでは階級平等が志向されているわけではないということは注意しておく必要がある。下線部の通り、たまたま裕福になったという新興階級の成り上がりが称賛されるわけではない。ここでは、すでに見てきた貴族制の肯定と同じく、階級はその人の具えている徳の結果として与えられているという主張が繰り返されている。

したがって、キングズリーにとっては、「真のデモクラシー」は「真の貴族政治」と似通ったものであり、これらの共通条件となるのがまさに「徳」なのである。ゆえに「真のデモクラシー」が対峙するのは「貴族政治」ではなく、「無秩序」である。

慎みと畏れをもって、我々の自由の責任を受け入れよう。そして憶えておこう。自由はあるひとつの旧態依然とした方法 (one old-fashioned way) によってのみ維持される。憶えておこう、真のデモクラシーの条件は、真の貴族政治 (aristocracy) の条件——すなわち、徳と同様なのだ。[……]「ジェントルマンたちよ、徳なのだ、ああ、徳こそがジェントルマンを作る。徳こそが貧者を富者にし、臣民を王とし、卑しき者を高貴に、醜き者を美しくする」¹⁵。[……]したがって我が子らに教えよう。彼らが——神が禁じているように——自らの罪によって墮落し、愚鈍となるようであれば、この地上にもはや、我々の子孫を征服し、道理に引き戻すような勇敢な民はいないのだ [……]。[そうなれば] 彼らと全文明世界 (whole civilised world) の眼前にあるのは、長らく世界が目にしなかった長い無秩序 (anarchy) の時代だ [……]。(LDA 146)

「旧態依然とした方法」、つまり、徳がただしく貴族政治をみちびき、知識や自制がひろまってゆくことこそが「文明化」であり、むろん、その土台となるのは信仰である。神が禁じたような、罪による墮落に陥れば、文明社会は崩壊し、無秩序のみが残る。ここでキングズリーが「真の」デモクラシーと「真の」貴族政治をほとんど同等のものとして見なすのは、次のような「平等」観が根拠となっている。

「平等」には真のものと偽りのものがある。つまり高貴なものと下劣なもの、健全なものと破滅的なもので、前者は互いにたいする敬意によってすべての人々を高みへと引き上げるが、後者は相互間の嫉妬によってすべての人々を引き下げ、いかなる自己犠牲もない。(LDA 141)

キングズリーにとっては、唯一絶対的な「真実」として、信仰に基づく徳を条件とした政治こそが正しいものとなる。そうではない平等をいくら追求しても、全員がひとしく悪魔の餌食となるだけである (LDA 142)。よって必然的に、すでに徳・知識・自制を身につけた上の階級は下の階級を引き上げる責務をになうものとなり、階級制が肯定される。ただ

¹⁵ ジョン・リリー (John Lyly, 1554-1606) の『ユーフェイズ』(Euphues : or the Anatomy of Wit, 1586) からの引用。

し、それは主従関係ではない。なぜなら、神のみが唯一の主だからである。

自由な人間の国——そしてもし可能ならば、自由な人間の全世界—— (A nation—and, were it even possible, a whole world—of free men)。神と自然にむかって、ときはなたれたひたいをあげ、誰も主人とは呼ばない。というのも、ただひとりだけが主人であるからだ。それはすなわち神である (one is their master, even God)。[……] 神の法が心にあるのだから、最後には、王 (kings) も司祭 (priests) も要らぬのだ。なぜなら男女おのおのが、自らの土地において、神に仕える王であり、司祭であるからである。[……] これこそがまさに、地上に来たる神の王国 (the Kingdom of God come on earth) ではないのか? (LDA 148)

ここでの文言はルターの万人祭司説に類似しているが、実際には、愚かな大衆が自決権をもって政治を取りおこなうことは全員の破滅をまねき、文明に反すると述べるものであり、聖職者や貴族階級を否定しない。「神の国の地上での実現を妨げるのは、自らが自らの主人になりたがる、つまり境遇 (circumstance) を統御したがる人々の「身勝手」 (selfishness) であり、「暴君から解放されたいとのぞむなら、まず自己というもつともわるい暴君から自由にならねばならない」からである (LDA 148)。キングズリーの目には、人間が人間であるために神から独立した存在として振る舞おうとするデモクラシーは、獣じみた個々人の欲望が集合して肥大化した状態にすぎないものであった。「真に」人間が人間であるためには、何よりも信仰に導かれた文明的存在となり、こうした獣性から脱する必要があったのである。

V 結論

キングズリーの理想においては、人間は文明的な存在として自らの放縦を戒め、おのおのが自らの主人としてではなく、皆ひとしく「神に仕える僕」として、真の「デモクラシー」を追求するべきであった。古来、そうした徳をそなえた者だけが英雄たりえたのであり、自由放任の政治はローマのような悪しき帝国主義にしか帰結しない。アメリカのデモクラシーを批判しつつ、「アメリカ人」のなかにローマではなく北方人の、イングランドと共通する民族的起源を見たキングズリーは、大衆に対し英国のような貴族による教導をもたらすことが真のデモクラシーには必要だと信じていた。

ボストンで交流したジョン・ウィティア (John Whittier, 1807-92) は、キングズリーの妻に書き送った手紙のなかで、「彼の心のなかには、彼の民族の物質的、道徳的、霊的幸福 (welfare—physical, moral, and spiritual—of his race) への関心でいっぱいであったようだ」 (Letters 2:446) と評価している。じっさいキングズリーは、カーライルの影響を受け、また同時代のマシュー・アーノルドらと危機意識を共有しつつ、自らの世代の消えゆく「信仰」を、時代の動きのなかで護持し、取り戻そうとしつづけた。

一方でボストンでの接待役をつとめたアニー・フィールズ (Annie Fields, 1834-1915) は、キングズリーの「もし人生をもう一度やりなおすとしても、私は物乞いなどしないだ

ろうと思う」(“But if I had my life to live over, I believe I should never beg”)という発言について、日記の断片に「彼はこうした問題について、[……] 無一文の人々の苦しみに充分に近づいているとはいえなかった」(qtd. in Adrian 97) と書き記している。奴隷をふくむ階級格差を自己責任へと還元して看過することは、今日のみならず、19世紀当時においてもすでに、キングズリーの思想的限界として認識されていたように思われる。

以上のように、明白に差別的な言動から、とりわけ現在では目を注がれることがほとんどないキングズリーだが、他の知識人たちと同様、混迷した過渡的時代としてのヴィクトリア時代に危機感をおぼえ声を上げたこと、50年に自ら「君主主義者」と名乗って以降既存体制の価値を擁護し、止めることのできない時代の新要素である「デモクラシー」を「キリスト教化」するために小説や説教・講演などを通じて活動をつづけたこと、南部の敗北を経てもそれまでの姿勢をかえることなく主張しつづけたことから、彼のこの「デモクラシー」にたいする思想的一貫性は明らかであろう。周囲の予想をうらぎる南部支持を通じて表明された衆愚政治批判には、アングロ・サクソン世界という枠組みで19世紀政治社会思想史を再検討するうえで重要な要素として、ヨーロッパおよび自民族の社会的起源へのまなざしと、信仰と大衆を結び留めようとする聖職者としての使命が映じられているのである。

付記

本研究は研究プロジェクト「環大西洋の思想交流における社会的なものとの葛藤と変容」の一環として神戸大学国際文化学術研究科の助成を受けたものである。またJSPS 科研費 26770100 の助成を受けたものである。

略号

キングズリーの著作については、以下の略号と巻数・頁数によって出典を示す。

<i>Alton</i>	……	<i>Alton Locke, Tailor and Poet</i>
<i>Heroes</i>	……	<i>The Heroes; Or, Greek Fairy Tales for My Children</i>
<i>LDRI</i>	……	<i>Three Lectures Delivered at the Royal Institution, on the Ancien Regime as It Existed on the Continent before the French Revolution.</i>
<i>LDA</i>	……	<i>Lectures Delivered in America in 1874</i>
<i>Letters</i>	……	<i>Charles Kingsley, His Letters and Memories of his Life</i>
<i>Pentateuch</i>	……	<i>The Gospel of the Pentateuch: A Set of Parish Sermons</i>

参考文献

Adrian, Arthur A. “Charles Kingsley Visits Boston.” *Huntington Library Quarterly* 20.1(Nov.,1956):94-97. Web.

- Barnes, Geraldine. *Viking America: The First Millennium*. Cambridge: D. S. Brewer, 2001. Print.
- Carroll, Robert P., and Stephen Prickett. *The Bible Authorized King James Version*. Oxford: Oxford UP, 2008. Print.
- Cazamian, Louis. *The Social Novel in England 1830-1850*. Trans. Martin Fido. Vol. 2. Oxon: Routledge, 1973. Print.
- Colloms, Brenda. *Charles Kingsley: The Lion of Eversley*. London: Constable, 1975. Print.
- Conway, Moncure Daniel. *Autobiography: Memories and Experiences of Moncure Daniel Conway*. 1904. Cambridge: Cambridge UP, 2012. Print.
- Cottle, Amos S. *Icelandic Poetry, or The Edda of Saemund*. Bristol, 1797. Print.
- Kendall, Guy. *Charles Kingsley and his Ideas*. London: Hutchinson, [1947]. Print.
- Kingsley, Charles. *Alton Locke, Tailor and Poet*. 1850. London: J. M. Dent, [1910]. Print.
- . *The Heroes; Or, Greek Fairy Tales for My Children*. 1856. New York: Macmillan, 1885. Print.
- . *The Gospel of the Pentateuch: A Set of Parish Sermons*. London: Parker, Son, and Bourn, 1863. Print.
- . *Three Lectures delivered at the Royal Institution, on the Ancien Regime as It Existed on the Continent before the French Revolution*. London: Macmillan, 1867. Print.
- . *Lectures Delivered in America in 1874*. Philadelphia: Jos. H. Coates & Co., 1875. Print.
- . *Charles Kingsley, His Letters and Memories of his Life*. 1877. 2 vols. Ed. Frances Eliza Kingsley. Cambridge: Cambridge UP, 2011. Print.
- Phillips, Paul T. *A Kingdom on Earth: Anglo-American Social Christianity, 1880-1940*. Pennsylvania: The Pennsylvania State UP, 1996. Print.
- Reed, John Shelton. *Glorious Battle: The Cultural Politics of Victorian Anglo-Catholicism*. Nashville: Vanderbilt UP, 2000. Print.
- Stanley, E. G. *Imagining the Anglo-Saxon Past: The Search for Anglo-Saxon Paganism and Anglo-Saxon Trial by Jury*. 1975. Cambridge: D. S. Brewer, 2000.
- Thorp, Margaret Farrand. *Charles Kingsley, 1819-1875*. Princeton: Princeton UP, 2015. Print.
- Thorpe, Benjamin. *Northern Mythology: Comprising the Principal Popular Traditions and Superstitions of Scandinavia, North Germany, and the Netherlands*. Vol. 1. London: E. Lumley, 1851. Print.
- Walker, Stanwood S. "‘Backwards and Backwards Ever’: Charles Kingsley’s Racial-Historical Allegory and the Liberal Anglican Revisioning of Britain." *Nineteenth-Century Literature* 62.3 (Dec. 2007): 339-79. Web.

Waller, John O. "Charles Kingsley and the American Civil War." *Studies in Philology* 60.3 (1963): 554-568. Web.

Wawn, Andrew. *The Vikings and the Victorians: Inventing the Old North in Nineteenth-Century Britain*. Cambridge: D. S. Brewer, 2000. Print.

Williams, David. *Bitterly Divided: the South's Inner Civil War*. New York: The New Press, 2010. Print.

ウィリー、バジル『十九世紀イギリス思想——コールリッジからマシュー・アーノルドまで』米田一彦・松本啓・諏訪部仁・上坪正徳・川口紘明訳、みすず書房、1985年。

ウィリアムズ、レイモンド『文化と社会 1780——1950』若松繁信・長谷川光昭訳、ミネルヴァ書房、2008年。

小関隆『一八四八年——チャーティズムとアイルランド・ナショナリズム』未来社、1993年。

清瀧仁志「マシュー・アーノルドにおけるデモクラシーと教養」、『政治研究』第49号、九州大学法学部政治研究室、2002-3年、73-115頁。

サイクス、ノーマン『イングランド文化と宗教伝統——近代文化形成の原動力となったキリスト教』野谷啓二訳、開文社出版、2000年。

サンダーズ、アンドルー『ヴィクトリア朝の歴史小説』森道子・米本弘一・稲積包昭訳、英宝社、2013年。

日本イギリス哲学会編『イギリス哲学・思想事典』研究社、2007年。

日本聖書協会編『聖書 新共同訳——旧約聖書続編つき』日本聖書協会、2006年。

盛節子『アイルランドの宗教と文化——キリスト教需要の歴史』日本基督教団出版局、1991年。